

日元関係についての研究

—南九州地域を中心に—

韓 艶麗*
Han Yanli
何 曉毅**
He Xiaoyi

I はじめに

日元関係については、モンゴル襲来が有名で、日元間の貿易や文化交流については、ごく一部の人間にしか知られていない。また現在の中国では、モンゴル襲来、日元関係については、歴史研究者以外の人々にはほとんど知られていない。台湾出身の歴史学者である魏榮吉は、元時代は日本にとっても中国にとっても忘れがちな時代であると考えている¹⁾。確かに日元関係は、日本側には蒙古襲来という戦争のイメージが強く、中国側にはごく一部の人間に知られていない関係として見られている。しかし佐伯弘次氏は、日元貿易は日宋貿易の延長であり、一方で戦争をしながら、他方で貿易を行っていたという不思議な関係で、得宗による独占貿易であったと考えられている²⁾。確かに日元関係は日宋関係、日明関係に劣らないくらい盛んであった。しかし今までの研究においては、南九州地域（現鹿児島地域）を中心とした日元関係の研究はまだすすんでいないと言える。

II 日元関係の概要

以下では、元時代にクビライハンによる対外政

策、日本遠征の原因、日本と元との関係を長く政治的に緊張状態にした二回にわたるモンゴル襲来期について述べ、一方で戦争を行いながら、他方では日元貿易とそれに伴う文化交流が活発に行われていた実態につき考察していきたい。

(1) モンゴル襲来時における日元関係について

クビライハン、モンゴル帝国の第三位としての皇位についた後、高麗（1231～1259）を服属させ、宋（1235～1276）を滅亡させ、さらに安南、タイ、ビルマなどを従えて世界にかつてない大帝国（元帝国）を築いた。日本に対して1266年から1271年まで前後4回国書を送ったが、日本側に無視された。1273年高麗国内で起こった三別抄の乱を鎮圧し、同年宋の首都防衛上重要な拠点である襄陽を征服した。その結果、本格的に日本遠征を計画し始めた³⁾。以下ではクビライハンが日本を二回にわたって遠征した文永の役と弘安の役を提示していきたい。

文永の役

1274年10月3日、クビライハン、日本遠征軍を派遣した。この遠征のために、高麗から大小900艘の船、船大工や人夫3万5百余人が徴発されてい

*中国長江大学外国語学院日本語学科講師

**山口大学・大学教育機構教授

1) 魏榮吉の『元・日関係史の研究』（教育出版センター、1993年）5頁。

2) 佐伯弘次先生の『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』（中央公論新社、2003年）193頁。

3) 佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』88頁。

た。この日元軍、高麗軍を加えて2万6千の軍が合浦を出航した。目指したのは大宰府であった。対馬の西岸佐須の海を攻撃で、対馬全島を制圧した。そして10月9日に元軍は壱岐島を目指した。壱岐でも守護代平景隆は百余騎を率いて防戦したが、敗北した⁴⁾。壱岐を勢力下にいった元軍は、平戸・鷹島などの島を襲い博多を目指し、10月19日に、ついに元軍は博多湾に全貌を現した⁵⁾。勝利の勢いに乗っていた元軍は1275年の10月11日の朝、水城から博多方面でみんななくなっていた。結局第一回目の日本遠征は失敗でおしまいになった。今回の失敗にめぐって各論で説明されている。従来「神風」で元軍が沈んだという説が有力であったが（中国側の先行研究では神風の方が有力である）、最近の研究で、『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』（岩波書店）に記されている「官軍不整、又矢盡、惟虜掠四境而歸」⁶⁾という説に基づき、太田弘毅氏は混乱軍でかつ艦船数が多いため、軍議が一致せず、また用意した矢が尽きたため元軍が撤退したと説明している⁷⁾。杉山正明氏の説によれば、クビライハンの今回日本遠征の目的は南宋大進軍の側面作戦として、従来から南宋と海上通交していた日本を威嚇しことにあった⁸⁾。

上述のように第一回目の日本遠征はクビライハンの日本側に元側の力を見せつけようという目的だった。『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』に「十四年（1277年）日本商人、持金来易銅錢。許之」、1278年十一月、元は沿海官司に詔諭して日本商船の貿易を許す。その十二月、北条

時宗、名僧を請ぜんため使僧を渡宋せしむ。1279年五月宋僧無学祖元ら来る。六月、日本商船四艘、慶元に至り、交易を許さる」⁹⁾記されてある。これが第一回目の日本遠征が終了して、まもなく日元貿易が行われていたことを指している。

弘安の役

1275年3月クビライハンによって高麗からの使者杜世忠を送ったが、9月に鎌倉幕府の執権北条時宗は、彼らを竜口の処刑場で斬首した。その後1279年宋の降臣范文虎の部下である周福・欒らを使者として派遣したが博多で殺された¹⁰⁾。こうしてクビライハンの外交交渉は失敗し、必然的に1281年第二回目日本遠征が実行させた。日本側は文永の役と違って十分な応戦準備をしていた。「石築地」「異国警固番役」、「異国降伏祈願」などの対策を採っていた。この中で「石築地」は大規模に築かれ、東は香椎から西は今津にいたる約20キロメートルに及んでいた。この中で薩摩国、日向国と大隅国の諸荘園が今津の石築地を分担した。それら石築地の中で今まで保存状態がもっともよいのは今津の石築地である¹¹⁾。このように南九州地域における守護、御家人たちも重要な役割を果たした。

元側も第一回目の文永の役の際と比べて、十分な準備を行った。モンゴル人、「漢人」、高麗人からなる東路軍4万人、1276年宋征服後范文虎らの率いる元に降伏した南宋軍人を主力とする江南軍10万であった。江南軍と東路軍は壱岐島で合流して大宰府を目指す計画であった¹²⁾。今回は前回の四倍からなる軍隊で、雄大な規模のものであるこ

4) 小林一岳『元寇と南北朝の動乱』（吉川弘分館2009年）30頁。

5) 佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』94～98頁。

6) 和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』101頁。

7) 佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』99頁。

8) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡（下）』128頁。

9) 和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』102、238頁。

10) 小林一岳『元寇と南北朝の動乱』37～41頁。

11) 西日本本事業部「志布志町誌」（凸版印刷株式会社1973年）

12) 佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』141～144頁。

とがわかる。

1281年5月3日、元と高麗の連合軍である東路軍四万人、900艘の船団が高麗の合浦を出発した。21日対馬に達し、高麗軍の一部を上陸させて島内を制圧した後、26日壱岐島へ向かった。壱岐島は、江南軍と合流する場所であった。東路軍は、この海上で約10日間待ったが、江南軍は到着しなかった、故に6月6日東路軍は博多湾内の志賀島に襲来した、また東路軍の一部300艘は、長門国沿岸を襲った。江南軍は6月末にようやく平戸島沖に到達し、江南軍の一部300艘は東路軍と合流して壱岐島沖にあらわれ、日本軍と6月29日壱岐島沖、7月2日志賀島で激しく戦った¹³⁾。しかしいずれも両軍の主力同士の戦いではなく、部分的な戦争にすぎなかった。さて7月2日に主力が鷹島に集結し、両軍はこの島から博多湾に進入し、大挙して大宰府を襲う計画を立てた。しかし、この計画は実現せず、台風によると考えられる大風雨のために日本遠征は失敗に終わった¹⁴⁾。クビライハンの今回の日本遠征には異国警護番役と石築地が実際に役割を果たし、元軍が容易に上陸できず疫病も流行し、その上「神風」が起り結局失敗に終わった¹⁵⁾。

上記のように二回にわたったモンゴル襲来は、日本と元との政治的な関係を長く緊張状態にした。しかし日元関係全体が終始対立関係であったわけではない。政治的には日・元は一定政治的に緊張状態にありながら、経済的・文化的に活発な交流が展開した。第一節でも述べたようにモンゴル帝国建国以来、平和的に交流することによって自分の影響力を拡大しようとするクビライハンが

本来意図していたことが、日元貿易であり、クビライハンの意図がその後日元貿易が盛んに行く主要な理由になるだろうと考えている。次節で、当時行われていた日元貿易の実態を考察してみたい。

(2) 日元貿易、日元間の文化交流について

前述したように、クビライハンの日本への国書の内容、意図から日本に対して和親的であったことが明らかになった。そのため、日元間では経済的・文化的に活発に交流していたと考えられる。当時日元貿易や日元間の文化交流はどのように展開していたのか、日元貿易や日元間の文化交流の実態を考察する必要がある。私は二つの側面から考察していきたい。一つは五島遭難船、新安沖沈没船の分析による貿易の実態解明、もう一つは二百二十数人（榎本渉氏は実際はこれよりも多いと指摘している¹⁶⁾）の渡海僧と三十数人の渡来僧の活動を探ることを通して日元間における文化交流の実態を明らかにしていきたい。

五島で難破した「唐船」

1298年4月藤太郎入道忍恵の「唐船」（日本から中国に渡海する貿易船）が五島の海保（現長崎県南松浦郡若松町）から出発して中国（元）へ向かう途中樋島（現日ノ島）付近で遭難した。その難破船に関する鎮西探題への注進状には、積荷が「関東方々御物」と記されていたが¹⁷⁾、「関東方々」とは「関東」・「葛西殿」・「大方殿」・「浄智寺」¹⁸⁾で、史料から当時の日元貿易における日本から中国（元）への輸出品であることが分かる。「関東」は得宗北条貞時で、積荷が砂金、銀

13) 網野善彦『蒙古襲来』「日本歴史」（小学館1974年）、198～211。

14) 佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』142頁。

15) 小林一岳『元寇と南北朝の動乱』（吉川弘分館2009年）、38頁。

16) 榎本 渉『東アジア海域と日中交流』、190頁。

17) 藤田勲夫『首里円覚寺と近世の琉球禅林』（『大慈寺と対外交流』）197頁。

18) 森克己『続々日宋貿易の研究』（国書刊行会 1977年）、83頁。

劍、白布であり、「葛西殿」は貞時の父方の祖母で、積荷は砂金、細絹、水銀樽、金胴、腹當、大刀、刺刀、茶杯、半插盃、硯箱、宿直物、茶入物臺、蒔繪硯箱、小袖であり、「大方殿」は貞時の母で、積荷は圓金、砂金、水銀、銀劍、白布、白帷、唐紗袈裟、衲衣であり、「浄智寺」は貞時従兄弟かつ女婿である師時の菩提寺で、積荷は砂金、銀劍、珠、水銀などの輸出品があげられている。村井章介氏の研究では、いずれも北条得宗家の関係者が荷主であったと指摘している。彼らの輸出品を観察すると最初にあげられているのがほとんど金である。これはクビライハンが従来の日宋貿易を遮断させ日本との貿易を通して金を入手しようという意図¹⁹⁾とかみあっているのではないかと思う。すでに第一節にも触れた『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』の「十四年(1277年)日本商人、持金来易銅錢。許之」の記載は、クビライハンが日元貿易に銅錢と金の交易に積極的であったことを示している。このように金は元帝国への重要な輸入品となり、日本側も錢を鑄造せず中国の銅錢を通貨として流通させていたので、日元貿易は日元両国にとって相互的に不可欠であった。日宋貿易の際に銅錢の輸出は禁止されていたが、それと対照的に日本への銅錢の輸出は日元貿易の方が積極的に行われたと私は考えている。銅錢輸出の面から考えると、日宋貿易よりも日元貿易の方が盛んであったと考えられる。

村井章介氏はそれらの輸出品を貴金属類、布帛類、工芸品の三種類に分けて分析した。その結果、貴金属類、布帛類の中心は金、布という通貨的機能を担う品で、貿易取引の決済手段として使

用された可能性がある。工芸品は当時「一級品」であるが、陶磁器と異なって大規模な生産組織や高度な工業技術を必要とする品ではない。故に当時の日本は、「一級品」を輸出して陶磁器・銅錢という加工品を輸入する貿易形態であったことを指摘している²⁰⁾。

上述のように、荷主はいずれも北条得宗家の関係者であり²¹⁾、佐伯弘次氏は、当時の日元貿易は得宗による独占貿易であったと考えている²²⁾。また、後述の村井章介氏の説では、渡来僧の多くは北条氏得宗家の招請で渡来したと指摘されている²³⁾。

上記のように難破した「唐船」の積荷により、当時の日元貿易における日本の元への輸出品が主に金であり、北条得宗家の独占的な貿易であることが分かった。次に日本は元から何を輸入していたのか。1976年に発見された新安沈没船を素材として考察してみたい。

新安沈没船発見

1976年韓国全羅南道新安郡の道德島沖における新安沖沈没船の発見により、日元貿易で当時の日本が元から輸入していた品目が明らかになった。その新安沖沈没船は、1323年中国明州から博多へ向かう途中遭難した日元貿易船であると考えられている²⁴⁾。

森克己『続々日宋貿易の研究』は、当時の日元貿易における日本の輸入品目としては「銅錢、香葉、禪僧の画幅什器類(茶、茶器、画幅、紫檀の卓、胡銅の花瓶、陶磁器)、唐織、一切経、儒書、禪僧の詩文集や語録等」と指摘している²⁵⁾。実際

19) 村井章介「日元交通と禅律文化」『南北朝の動乱』(吉川弘分館、2003年)、230頁。

20) 村井章介『南北朝の動乱』吉川弘分館、233頁。

21) 佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』(中央公論新社 2003年)198頁。村井章介『南北朝の動乱』、230頁

22) 佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』、(中央公論新社 2003年)、198頁。

23) 村井章介『南北朝の動乱』、233頁。

24) 西谷正「新安海底発見の木簡について」、『同(続)』『九州文化史研究所紀要』三十(九州文化史研究所、1950年)、261頁。

25) 森克己『続々日宋貿易の研究』126頁。

に、新安沖沈没船の積荷（図2）を確認すると、「銅銭、陶磁器、高麗青磁、日本製器・土器、金属製品では瓶類、香炉、燈蓋、銅鏡、鉢、皿、水注などの容器、青銅製箸、高麗匙、楽器（銅鑼）、錠前、錘「慶元路」、炊事道具（フライパン式鍋）、木製品では包装用藻木箱、木桶、盤、漆塗食器、扇子、箸、家財調度品、娯楽道具（将棋の駒、植物遺体としては香料、香木、生薬材料、胡椒、巴豆、山茱萸、使君子、檳榔、荔枝、桃仁、銀杏、梅実、胡桃、榛、栗、桂皮、量薑、他は玉製品）などの積荷が見られる。森本朝子氏は、この中に画幅、経巻、書籍、唐織なども当然あったはずであるが、前記の物は、通常上部の船室などに大事に積み込まれて、沈没とともに流失するか、その後海中で虫に食われるか腐植するかして、跡形もなくなっていると推測している。森本氏の指摘をふまえると、上記の森克己氏が指摘している日元貿易における輸出品・輸入品とほぼ合致していることがわかる。

更に、当時の日本における都市設計、僧服の色、技術などが元と類似している点が指摘されている。また、新安沖沈没船の発見により、日

元貿易船は寺院関係の比率が高い「寺社造営料唐船」²⁶⁾であること等も明らかになっている。新安沖沈没船における木簡に寺社名、「剛首」の名前、僧侶の名前、普通の日本人名等が書かれてあったことにより、当時の僧侶の往来が盛んであったこともうかがえる。次に渡来僧、渡海僧がどのような状況におかれて留学し、そしてどのように交流し、どのような活動を行われていた事を分析し、その活動が南九州地域にどのような影響を齎したのかについて考察してみたい。

渡海僧、渡来僧たちによる活動

和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国・日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』（岩波書店、1985年）、竹内理三編『大宰府・大宰府天満宮史料8、9、10、11』（寶月堂、1973年）に基づき、当時の日元交流の実態を示し、一体どの時期に日元貿易の交流、僧侶の往来が頻繁で、どの時期に途絶えたのかを示す。そしてその理由を解明していく。また、それらの渡海僧、渡来僧たちがどのような目的で往来し、どのような活動を行っていたのか。またその渡来僧、渡海僧たちの動向を表示し、分析したいと思う。

表1. 日元交流による年表

年代	交流の実際	出典
1277年	<ul style="list-style-type: none"> 春、渡宋商船帰り、宋朝の滅亡を告ぐ（『健治三年記』）。 日本商人、黄金を持して元に赴き銅銭と易ゆ（元史）。 	<ul style="list-style-type: none"> 和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』160頁。
1278年	<ul style="list-style-type: none"> 十一月、元は沿海官司に詔諭して日本商船の貿易を許す（元史）。 十二月、北条時宗、名僧を請ぜんため使僧を渡宋せしむ（円覚寺文書）。 宋僧西潤土曇帰国す（『大通禪師行実』・『元亨釈書』）。 	<ul style="list-style-type: none"> 和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』160頁。
1279年	<ul style="list-style-type: none"> 六月、宋僧祖元、執権北条時宗の聘により、大宰府に著す。 日本商船四艘、慶元に至り、交易を許さる（元史）。 	<ul style="list-style-type: none"> 『大宰府・大宰府天満宮史料8』325頁。 和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』160頁。

26) 西谷正「新安海底発見の木簡について」『同（続）』『九州文化史研究所紀要』三十三頁。村井章介『南北朝の動乱』、233頁。

1290年	・四月二十五日、幕府、大宰少貳經資をして、唐船點定錢を筑前國雷山千如寺造営用途に充てしむ。	『大宰府・大宰府天満宮史料9』52頁。
1292年	・六月、日本商船四艘に赴き難破し、一艘のみ慶元に達して交易する。 ・十月日本商船慶元に赴き、互市を求む(元史)。	・和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』161頁。
1293年	愚直師侃入元。(『愚直和尚伝』[白石虎月編1930年:373-74頁])	榎本 涉『『僧侶と海商たちの東アジア』(講談社)、114頁。
1295年	林叟徳瓊婦朝。(『覚元和尚年譜』[『大日本史料』6-31:155-68頁])	榎本 涉『僧侶と海商たちの東アジア』(講談社、2010年)、114頁。
1298年	・三月、南山士雲博多承天寺に住す。 ・八月十二日、鎮西探題北條實政、忍恵の唐船漂倒の際、關東御物を志佐税・奈留道佛以下の輩に懸けして沙汰せむ。	・『大宰府・大宰府天満宮史料9』126頁。 ・『大宰府・大宰府天満宮史料9』134頁。
1299年	・十月八日、元國の使僧一山一寧、子曇とともに博多に来著し、此日鎌倉に到る。	『大宰府・大宰府天満宮史料9』153頁。
1305年	日本船慶元に至る。僧竜山徳見これに便乗して入元す(真源大照禪師竜山和尚行状)。	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』161頁。
1306年	・四月、日本商人有慶ら元へ赴いて交易す。	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』162頁。
1307年	・日本商人、元の官吏と争い慶元を焚掠す(『真源大照禪師竜山和尚行状』)。 ・僧雪村友梅入元す(『雪村大和尚行道記』)。	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』162頁。
1309年	・正月、日本商人団、元の官吏の不法を憤り、明州を焚掠す(『明州繫年録』所収「道園集」・『康熙寧波志』)。	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』162頁。
1318年	・僧嵩山居中・石室善欒・古先印元・業海本浄・明叟齊哲ら入元す(『本朝高僧伝』『延宝伝燈録』・『古先和尚行状』) ・是歳、僧中岩圓月、博多に到り、渡宋せんとして果たさず。	・和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』162頁。 ・『大宰府・大宰府天満宮史料10』48頁。
1320年	僧寂室元光・可翁宗然・物外可什・別源円旨ら入元す(『寂室和尚行状』・『別源和尚塔銘』『本朝高僧伝』・『延宝伝燈録』)	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』162頁。
1323年	・是歳、南山士雲、安樂寺に住す。	『大宰府・大宰府天満宮史料10』182頁。
1324年	・是春、中岩圓月、鎌倉建長寺より、博多に至る。	『大宰府・大宰府天満宮史料10』209頁。
1325年	・九月、僧中嚴円月入元(『中嚴和尚自歴譜』) ・建長寺造営料唐船を元に遣わす(『中村文書』・『比志島文書』)	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』162頁。
1326年	・八月、元僧清拙正澄、博多に来る。 ・浄明寺僧太平妙準、弟子を入元させ福州版大藏經を求む(『藏經舍利記』)	・『大宰府・大宰府天満宮史料10』257頁。 ・和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』162頁。
1328年	関東大仏造営料唐船を元に遣わす計画あり(金沢文庫藏「金沢貞顯書状」)	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』163頁。
1329年	五月、元僧明極楚俊・竺仙梵僊、入元僧を従い、六月来朝す(『明極大和尚塔銘』・『梵仙録』・『竺僊和尚行道記』・『本朝高僧伝』・『延宝伝燈録』)	・『大宰府・大宰府天満宮史料10』308頁。
1332年	・住吉神社造営料唐船を元に遣わす(『住吉神社文書』) ・僧中嚴円月ら帰る(『中嚴和尚自歴譜』)	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』、163頁。
1333年	・白石契珣入元。(別源円旨『東帰集』送僧之江南) ・竹上人入元。(別源円旨『東帰集』送竹上人入江南兼簡旧友)	榎本 涉「日本中世史」4選書『僧侶と海商たちの東アジア』講談社、135頁。
1334年	・空叟智玄入元。(『平田寺文書』33、平田寺草創記)	榎本 涉『僧侶と海商たちの東アジア』講談社、135頁。

1341年	<ul style="list-style-type: none"> ・是秋、僧愚中周及博多を發し、元明州に至る。(『大通禪師語録』) ・十二月、足利直義、天竜寺造営料唐船二艘の入元を許す(『天竜寺造営記録』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『大宰府・大宰府天満宮史料11』、202頁。 ・和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』163頁。
1342年	<ul style="list-style-type: none"> ・夏、中岩圓月、渡元せんとして鎮西に再下す(佛種慧濟禪師中岩月和尚自歴譜)。 ・秋、僧祖能、渡元せんとして、博多に至る(大拙和尚年譜)。 ・秋、天竜寺船一艘を元に遣わす(『天竜寺造営記録』) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『大宰府・大宰府天満宮史料11』208頁。 ・『大宰府・大宰府天満宮史料11』208頁。 ・和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』163頁。
1345年	七月、僧士僊・妙在、元より還り、博多津に到る(禪林僧傳)。	『大宰府・大宰府天満宮史料11』237頁。
1350年	僧竜山徳見ら十八人、元の商船に便乗して帰る(『園太歴』) 僧旬椿庭海寿ら入元す(『本朝高僧伝』)	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』163頁。
1351年	<ul style="list-style-type: none"> ・四月、僧愚中周及、元より帰国し博多著す。(『大通禪師語録』) ・元僧東陵永嶼来る(『本朝高僧伝』・『延宝伝燈録』) ・五月入元僧靈見性海、元より、博多に至る(性海和尚行實)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・『大宰府・大宰府天満宮史料11』359頁。 ・和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』163頁。 『大宰府・大宰府天満宮史料11』363頁。
1356年	是歳、元選無文、義南菩薩・燦碧岩伴等を伴って元より博多に到る(深奥山方洗廣開基無文選禪師行業)。	『大宰府・大宰府天満宮史料11』452頁。
1367年	四月、医師但馬入道道仙、療病院造営料唐船の建造費として、棟別銭十文徴収の許可を幕府に申請す。(『師守記』)	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』163頁。

日元貿易、文化交流は、それらが頻繁な時期もあれば、一時的に途絶えた時期もある。私はその日元関係の一時的な空白期とクビライハンの二回にわたる日本遠征こそが、人々(歴史研究者以外)に日元関係は対立的関係であったという認識の原因ではないかと思われる。

1277年から1279年までは、日元貿易、文化交流があった事がわかる。その歴史的な背景は、前述したように、第一回目の日本遠征が1274年であるが、1277年から日元貿易、文化交流が行われたことから、クビライハンは日本遠征が終わり次第日本との交易を開始した事がわかる。それは杉山正明氏が指摘したクビライハンの第一回目日本遠征は、日本に元の力を見せつける意図が目的²⁷⁾であったのであり、故に通常通りの日元貿易、文化交流が行われたと私は考えている。また、「1277

年日本商人、黄金を持して元に赴き銅銭と交易(元史)」に日元交易が金、銅銭との交換により始まったことがわかる。これは前述したクビライハンが従来の日宋貿易を遮断させ日本との貿易を通して金を入手しようという意図²⁸⁾とも関連し、金は元帝国の重要な輸入品となり、日本側も銭を鑄造せず中国の銅銭を輸入し通貨として流通させていたので、日元貿易は日元両国にとり相互的に不可欠であった。

次いで1279年から1290年間までは、日元交流が途絶えた時期になった事がわかる。その歴史的な背景を考察すると1281年クビライハンが本格的な日本遠征(弘安の役)を行い、1294年クビライハンが没するまで元側、日本側は長期的な臨戦状態であったからであると考えられる。また1309年至元の「倭寇」事件勃発(1307年、日本商人、元の官史

27) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(下)』、128頁。

28) 森克己『続々日宋貿易の研究』、83頁。

と争い慶元を焚掠するという記事もあるが榎本渉氏はそれが単に年代の誤りであることを明らかにした²⁹⁾ のため、1309年から1318年までの空白期³⁰⁾、1327-28の泰定の「倭寇」事件のため、「1329年、元僧明極楚俊・竺仙梵僊、入元僧を従い、六月来朝す」、「1332年、僧中巖円月ら帰る」等僧侶の帰国がみられるが、貿易形態が「1332年、住吉神社造営料唐船を元に遣わす」しかみられない。だから1327年から1333年までの空白期が発生した。また1335-1336の元統の「倭寇」事件のため1335年から1341年までの空白期が発生した³¹⁾。1348年方国珍が浙江省で反乱を起こした元内乱のため、多くの僧侶たち（たとえば無文元選、愚中周及、性海靈見たち）が兵を避けて帰国した³²⁾。それから1352年から1356年までの空白期が生じた。

「倭寇」については上述したように三度の事件があった。榎本氏は「倭寇」に対する元朝貿易政策に関して、元朝は倭寇に対して警備を強化したが、それは貿易制限が目的ではない。警備体制を整えた上で貿易に臨むようにし、現実的には貿易に積極的な側面があったと指摘している³³⁾。そして森氏の日元貿易が消極的であるという説を否定し³⁴⁾、日元貿易は決して消極的ではなく、元朝の

ルースな貿易管理体制により活況貿易関係で、自由貿易時代である事を解明している³⁵⁾。だから三度の「倭寇」事件にも関わらず、日元貿易が活発に行われたと思われる。

前記の表の分析に戻ると日元交流の期間は1277年から1367（榎本氏が1295年から1365年までと指摘している³⁶⁾ 年までである。三度の「倭寇」事件と元内乱での空白期を除けば実際の交流期間は64年間になる。上述した三十数人、二百二十数人の僧侶たちの往来がこの64年間にあった事になる。榎本氏が元時代の僧侶往来が宋時代の僧侶往来と比べれば3~4倍の頻度で、この頻度は前近代の仏教交流史において他に類を見ないと述べている³⁷⁾。

さてその交流の活発性を呈した三十数人の渡来僧と二百二十数人の渡海僧の往来について見ていきたいと思う。渡来僧、渡海僧全ての名称等を記すことは割愛するが、その中で特に特徴的な活動が窺われる僧については表に示した。それら僧の活動の分析により当時の歴史的な背景を明らかにする。そしてこれらの渡来僧、渡海僧が南九州地域の僧侶とどのような関係があったのかを解明していく。

29) 榎本 渉『東アジア海域と日中交流』、124頁。

30) 榎本 渉『東アジア海域と日中交流』、121~130頁。

31) 榎本 渉『東アジア海域と日中交流』、130~133頁。

32) 榎本 渉『東アジア海域と日中交流』、140~145頁。

33) 村井章介『南北朝の動乱』、223頁。

34) 榎本 渉『僧侶と海商たちの東アジア』、190頁。

35) 榎本 渉『僧侶と海商たちの東アジア』、190頁。

36) 榎本 渉『僧侶と海商たちの東アジア』、155頁。

37) 榎本 渉『僧侶と海商たちの東アジア』、107頁。

表2. 渡来僧

法名	渡年	渡来方法	活動	ルート及び交通方法	出典
西潤小曇	第一回1271～1278年 第二回1299	第一回目は東遊の志を持ち渡来した。第二回目は一山一寧とともに派遣された。	北条貞時、亀山上皇に優遇され円覚寺、建長寺におられた。後に大通禪師という諡をもらった。1306年建長寺に示寂した。	第二回目は慶元一博多日本の商船	魏栄吉の『元・日関係史の研究』, 284頁
無学祖元	1279年	北条時宗が建長寺の住持をさせるための招聘	建長寺住持、円覚寺を開く、日本における臨済宗発展の基礎をつくった。1286年建長寺にて示寂。	太白(慶元)一博多日舟	『大宰府・大宰府天満宮史料 8』, 325頁。
一山一寧	1299年	ウルジャトハン(クビライハンの孫第六回目のハン)(図表)が日本の仏教を尊ぶから有道の僧を派遣し日本を勧誘し附庸するため派遣した。	伊豆の修禅寺に編置。建長寺、円覚寺の住持。浄智寺で4年間過ごした。1317年南禅寺で示寂した。はじめて作偈の試験を行い五山文学の土台を作った日本朱子学の祖ともされる。示寂後後宇多上皇から国師号を下した。	慶元一博多日本の商船	西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』(吉川弘文館, 1999年) 24, 35頁。
東明慧日	1309年	日本からの招聘	1310年鎌倉禅興寺に住持した。1311年円覚寺に移り、その後は山内に白雲庵を建てて隠居したが、その後も寿福寺・建長寺の住持を歴任し、円覚寺に戻った。		西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』, 4頁。
明極楚俊	1329	北条高時から国師の待遇での招聘	五山文学を発展させた。建長寺、南禅寺、建仁寺、浄智寺住持し、1338年建仁寺に示寂		魏栄吉『元・日関係史の研究』, 286頁。
清拙正澄	1325	大友貞宗の招聘	鎌倉建長寺に住持、禅規を刷新した。その後、浄智寺、円覚寺を経て後醍醐天皇の勅命で京都の建仁寺、南禅寺などに住持、信濃(長野県)守護の小笠原貞宗の招きで信濃伊賀良の曇秀山開善寺の開山となった。1340年南禅寺に示寂した。	慶元一高麗・耽羅一博多建長寺再建のための建長寺船	西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』, 120頁。
東陵永瑠	1351	当時日本への旅する気持	天竜寺・南禅寺、建長寺・円覚寺などを住持 1365年示寂。元国皇帝より妙応光国慧海慈濟禪師の諡号を賜っていた。	太倉(現在の蘇州)一壱岐一博多商船	榎本 涉『東アジア海域と日中交流』(吉川弘文館, 2007年) 163～165頁。

西尾賢隆氏が当時の渡海僧たちを以下に三つ分類して分析している³⁸⁾。

- ① 東遊の志を持ち商船に乗って東渡した。たとえば、西潤小曇、東陵永瑠。
- ② 日本からの招聘により渡来した。たとえば、無学祖元、東明慧日、明極楚俊
- ③ 元朝の外交使節として派遣された。一山一寧、西潤小曇
そして、当時の元朝はチンギスハンのジャサク

におけるすべての宗教に寛大であり、あらゆる宗教を無差別に尊敬すべき政策のもとで各宗派(白雲宗、白蓮教は別)に対して自由な政策をとっていた。またそれらの渡来僧たちは国内からの亡命僧、各門派による内部対立ではなく、平和な形の交流であることを明らかにした³⁹⁾。

表中の僧の中で一山一寧の到来が当時日本の五山文学を成立と繁栄をもたらした、禅家を士大夫としての教養を備えて室町時代の外交にも影響を

38) 榎本 涉『僧侶と海商たちの東アジア』, 157頁。

39) 西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』, 5～7頁。

及ぼした⁴⁰⁾。一山一寧のもとで法嗣した日本僧侶（龍山徳見、聞溪良聡、雪村友梅、東林友丘）も大勢いるがその中に薩摩の僧侶である無惑良欽もいた⁴¹⁾。

また渡来僧ではなく中峰明本のもとを訪れた日本僧侶も大勢いる。彼は中国国内の各地を遊行脚して、修行と教化につとめた。彼は定住処を持たず、「幻住庵」と名づけた庵を各地に造って、そこに仮寓した。霊隠寺や径山から招かれても応じず、1318年には、アユルバルワダハン（モンゴル帝国八代目のハン）によって宮中に召されたが、応じなかった。それでも、金襴の袈裟を下賜され、「仏慈円照広慧禅師」の号、さらに「師子正宗寺」の院号を賜った。彼は、国内外に知られ東アジア各地から参禅する僧侶がいた。当時日本から古先印元、遠溪祖雄、復庵宗己、無隠元晦、明叟齊哲たちが参禅した。これらの僧侶の中で古先印元は薩摩の僧侶であることが知られてい

る⁴²⁾。前記のような無惑良欽と古先印元の活動を考察し、南九州地域における僧侶たちの活動を考察する。

渡来僧の多くは北条氏、大友氏の招聘を受け、渡来している。また天皇家の優遇を受け一生帰国していないのが大勢いるのを観察できた。それら渡来僧たちの活動により、渡海僧たちの活動に直接的な影響を与えた。たとえば一山一寧のような名僧のもとで法嗣する日本僧侶が殺到するようになって作偈の試験を行ったので、中国を遍歴して修行・参学に励む僧侶たちが多くなったと思われる。そしてそれらの僧侶たちが帰国後地位と名称を保証できるようになっているからである⁴³⁾。これが二百二十数人の渡海僧が元に入って修行・参学に励む原因であろうと推測できる。以下に渡海僧の活動（一部）を表に示し、それらの僧侶の足取りを分析していきたいと思う。

表3. 渡海僧活動に関する表

法名	入元期間	嗣法の師	活動		出典
			入元時	帰日後	
龍山徳見	1305 ～ 1350	一山一寧	天童山の東岩浄日・古林清茂などに参禅している。また黄龍慧南から荣西にいたる臨済宗の法流を受けて兜率寺に住持した。	足利尊氏の弟足利直義の招きを受けて京都建仁寺の住持となり、その後は天竜寺・南禅寺にも歴住した	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』、240頁。 榎本 涉『僧侶と海商たちの東アジア』、165～171頁。
雪村友梅	1307 ～ 1329	一山一寧	名宿を歴訪し、道場の叔本隆に参じた。また長安翠微寺に住持し、トクテムルハン（モンゴル12代目のハン）から宝覚真空禅師の号を賜った。	信濃の慈雲寺、京都の西禅寺、豊後の万寿寺に歴住した。	和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』240頁。 魏榮吉『元・日関係史の研究』、301頁。
古先印元	1318 ～ 1325	桃溪徳悟	杭州（浙江省）天目山中峰明本に参じて法を嗣ぎ、金陵（南京）保寧寺古林清茂などに参じた。	甲斐（山梨県）の恵林寺、山城（京都）三条坊門等の住持を歴任した。次いで鎌倉の浄智寺、円覚寺、建長寺などを歴住した。この間、奥羽（福島県）須賀川の普応寺などを開いた。	榎本 涉『僧侶と海商たちの東アジア』165～171頁。 魏榮吉『元・日関係史の研究』、301頁。

40) 西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』、5～25頁。

41) 西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』、58頁。

42) 西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』、66～79頁。

43) 村井章介・石井正敏・荒野泰典『倭寇と「日本国王」』「日本の対外関係」（吉川弘文館 2010年）、7頁。

中巖円月	1325 ～ 1332	東明慧日	天寧寺の靈石、鳳台の古林、雲巖の濟川、呉門の絶際、百丈の東陽、永福の竺田に参じた。	上野に吉祥寺を創建し、万寿寺・建仁寺・建長寺などの住持を歴任した。	魏榮吉『元・日関係史の研究』, 313頁。
愚中周及	1341 ～ 1351	夢窓疎石	明州曹源寺の月江正印に参ずる。次いで江蘇省鎮江府の金山寺に到り、松源下5世の即休契了に参学した。	京都南禅寺・丹波国天寧寺などを経て、1395年小早川春平の開基により、安芸国に佛通寺の開山となった。その後、將軍足利義持に請われて上洛し、1409年に紫衣を下賜された。	『大宰府・大宰府天満宮史料11』202頁。 榎本 涉『僧侶と海商たちの東アジア』115頁。

渡海僧の歴史の中で、もっとも驚くべき時期と言え、1343年一回で26人の僧侶が渡海していることである。榎本涉氏は1341年愚中周及が入元という記録は年譜の年代が誤っている⁴⁴⁾と指摘している。そして、後述の愚中周及の記録や和田清、石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝宋史日本伝・元史日本伝』1342年造天龍寺船派遣の記事と合致している。愚中周及の便乗した商船は光厳上皇の派遣した造天龍寺船である。1342年の造天龍寺船の派遣は「元統」倭寇事件の直後なので、元側は慶元で倭人の暴力事件を警戒していた時期になる。当時造天龍寺船はあくまで平和的な手段で辛抱強く貿易を要求したので、結局1343年に上陸でき元側は貿易を許可した⁴⁵⁾。造天龍寺船は60人以上の入元僧を乗せたが1342年から1343年まで元側の倭人に対する警戒により、乗船した30人以上の僧侶が殺されている。この中に無事に生き残ったのが愚中一行11人と清拙正澄の弟子たちである25人のうち8人が上陸できたといわれている⁴⁶⁾。榎本涉氏は造天龍寺船の派遣により「元統」倭寇事件後、一時途絶えた日元貿易が復活したと指摘している⁴⁷⁾。後述の愚中の語録からわかるように、この造天龍寺船はいろんな人々の願いを運んだ貿易船

であることがわかる。たとえば愚中僧侶は知識を深めるため、光厳上皇の天龍寺を創るため大蔵経を求める、清拙正澄の弟子たちが師の撰述や頂相の著賛などを求めるためであることがわかる。また当時の僧侶たちが入元ブームになっていることがわかる。たとえば、中岩圓月という僧侶は入元のために三回も博多に到っている。結局入元できたかどうかは不明であるけれども、当時の僧侶たちの入元する意志、志を知ることができる。

さて上記の渡海僧の数を渡来僧の数と比べてみれば、渡海僧の方が渡来僧の7倍以上であることがわかる。ではなぜ渡海僧の方が多いのであろうか。ここでその理由を考えてみたい。『大宰府・大宰府天満宮史料11』における愚中周及の「大通禪師語録」「居住持者、非萬人之傑、則千人之英也、而淺易如此、我又誰依、不如尋知識於大唐、由此切南遊之志、今茲上皇創天龍寺、遣商船求藏經於元國、於是喜而托之」⁴⁸⁾現代日本語に訳すれば「寺社の住持者になるために、万人の傑ならず、千人の英なり。知識は浅い私誰頼るか、故に大唐（元）に入り知識を求めるのがよい、江南遊を志す。今茲上皇（光厳上皇）は天龍寺を創り、商船を遣わし、藏経を元國に求む。是において喜

44) 榎本 涉『東アジア海域と日中交流』, 151頁。

45) 榎本 涉『東アジア海域と日中交流』, 153～155頁。

46) 榎本 涉『東アジア海域と日中交流』, 152頁。

47) 榎本 涉『東アジア海域と日中交流』, 155頁。

48) 竹内理三『大宰府・大宰府天満宮史料11』（大宰府天満宮 1980年）、202頁。

んで託す。」という記録から愚中周及の入元目的がわかる。すでに述べたように村井章介氏の説によれば僧侶たちが中国（元）で経歴して帰国後の地位と名称を保証されるようになっていた⁴⁹⁾。数多くの入元僧たちが寺社に参じ帰国後寺社の開祖、住持者になっているのは愚中の語録と合致している。したがって、数多くの渡海僧が愚中周及のような理由があり入元しているのであろうと推測できる。また一山一寧のような名僧のもとで法嗣を求める日本僧侶が殺到するようになって作偈の試験を行ったので、中国を遍歴して修行・参学に励む僧侶たちが多くなったと思われる。このような目的があるからこそ渡海僧の方が圧倒的に多いのではないかとと思われる。

上述したように僧侶たちの交流は活発であった。しかし、前述した三回の倭寇事件と元内乱により日元交流に空白期が生じた。その空白期は日元貿易による僧侶の往来がまったく途絶えたとは思わない。なぜならば、渡海僧たちの入元した時期を見ていくと、空白の時期にも入元していた僧侶が見られる。したがって空白期には僧侶たちの交流が減少したものの、まったく交流がなかったという訳ではない。1248年方国珍、張士城による元末の内乱で日元交通の航路は慶元—博多であったが、慶元は戦争状態の危険性のため、当時の貿易ルートは多様化した。その中で福建—薩摩—高瀬という航路が注目すべきであると、榎本涉氏が指摘している⁵⁰⁾。元末の日元貿易、文化交流の航路は福建—薩摩—高瀬になったことは南九州地域における日元関係が登場した事を反映している。私は前述した2名の薩摩僧侶である無惑良欽と古先印元の活動、日元交通は薩摩を経由してい

ることを踏まえ、大慈寺の宋版『大般若経』の将来における歴史的な背景考察してみる。

日元交通の経由地域である南九州地域は、中国大陸や東南アジア、琉球などの交流拠点であると言われている。鹿児島県内では宋銭、陶磁器の破片などを発掘され⁵¹⁾、志布志の大慈寺には宋版『大般若経』が所蔵され、山宮神社、新田神社、鹿児島神宮にも宋、元製の鏡などが所蔵されている。これらの実物は日元関係が盛んに行われたことを十分物語っていると思う。故に上述のように日元関係全体の実態を踏まえ、南九州地域における鹿児島県下の寺社における日元関係を示す実物となる宋版大般若経、銅鏡（宋、元代）を素材として日元関係のあり方を考察する。またこれらの実物が南九州地域（現鹿児島地域）に持たされた歴史的背景や影響などを探る事を通して、日元関係の実態、特徴を明らかにしていきたいと思う。

Ⅲ 南九州地域にける日元関係について

歴史というものは地域史により構成されているので、日本全体の歴史を考察する上で、各地域の歴史を他地域と関連して考える事は重要である。ゆえに上述したように日元貿易、日元間の文化交流に関する日本全体の動きを概観した上で、南九州地域を素材として日元関係を示す遺物を考察し、当該期南九州地域における日元貿易や日元間文化交流の分析を通じて、当時の日元貿易、日元間の文化交流の実態についてさらに掘り下げて考察してみたい。以下では南九州地域における日元関係にかかわる大慈寺の宋版大般若経、

49) 村井章介・石井正敏・荒野泰典『倭寇と「日本国王」 「日本の対外関係」 (吉川弘文館 2010年), 7頁

50) 榎本 涉『東アジア海域と日中交流』, 190頁。

51) 日隈正守 高津孝 丹羽健治『海が運んだ中世鹿児島—陶磁器・中国銭・書籍が語る』東アジア文明— (鹿児島図書館 2006年), 1~6頁。

鹿児島県下における銅鏡等を素材として日元関係の実態を検討していきたいと思う。

(1) 大慈寺における宋版大般若経について

志布志は、国内外航路の要衝となっていた良港であり、薩摩・大隅の重要港湾の一つで、中世における中国・琉球との繋がりが深かった⁵²⁾。そして、志布志における大慈寺は対外との接点を有して異文化を受容していた⁵³⁾。大慈寺の異文化受容に関しては、特に中国文化の影響が深いと言われている。『志布志町誌 上巻』によれば、大慈寺に県重要文化財が八点収蔵されている⁵⁴⁾。その中で日元関係を示す物は、開山玉山禪師真筆⁵⁵⁾と宋版大般若経(図1)である。大慈寺における日元関係の実態を示すために、これらの重要な文化財が大慈寺に将来された歴史的な背景を探る必要がある。日元関係全体を踏まえ、当時の大慈寺における日元関係のありかたを見ていきたいと思う。

大慈寺は、南北朝時代である1340年この地方で南朝方の武将として活躍した楡井頼仲の開基、玉山玄提和尚の開山で創建された⁵⁶⁾。開山である玉山玄提(? - 1351)は信濃国(現長野県)の出身とされ、京都南禅寺の開山大明国師に学び、その後、中国(元)に入り、湖南・湖西の四明の浄慧禪師のもとで八年間修行を積んだ⁵⁷⁾。帰国した後、楡井頼仲に大慈寺の開山として請ぜられ

た⁵⁸⁾。

『宋版大般若経』を将来したのは、玉山玄提和尚の後を継いだ大慈寺の二世住職の剛中和尚である。剛中和尚自身も中国(元)遊学を二回志したが、それを果たすことができず、当時大隅守護としての島津氏の協力をえて、弟子の十高僧を選んで元に送り蔵経を求めさせた⁵⁹⁾。それが大慈寺に一卷現存している『宋版大般若経』である。この『宋版大般若経』は将来された正確な年代が判明していないが、梶浦晋氏が1377年以前元末明初であると述べている⁶⁰⁾。『志布志町誌 上巻』にも剛中が弟子の十高僧を選んで元に送り蔵経を求めさせたと書かれてある⁶¹⁾から、元代に蔵経を将来されたのが正確であると思われる。元末の元内乱により日元交通が福建—薩摩—高瀬に変更していたので、当時剛中の弟子たちはおそらくこのルートを使用し、大蔵経を将来した可能性がある。当時彼らたちはどこの大蔵経を施入したかは不明であるが、梶浦晋氏は江南地方の明州周辺で入手したと考えられている⁶²⁾。

さて、剛中が弟子たちに将来させた大蔵経二蔵は、その一蔵を東福寺に寄せ、一蔵を大慈寺に施入した⁶³⁾。東福寺に寄せた一蔵は完全に保存されて国宝に指定されているが、大慈寺のものは明治初年門前的大火により焼失し、現存の一卷と一部の破片だけである⁶⁴⁾。東福寺に送られた一蔵は南

52) 藤田励夫「首里円覚寺と近世の琉球禅林」(『大慈寺と対外交流』) 187頁。

53) 藤田励夫「首里円覚寺と近世の琉球禅林」(『大慈寺と対外交流』) 197頁。

54) 『志布志町誌 上巻』(志布志町役場 1973年) 478頁。

55) 松下鉄太郎「大慈寺の磁器について」(『鹿児島文化財調査報告書第一輯』1954) 年33頁。

56) 『志布志町誌 上巻』 430頁。

57) 『志布志町誌 上巻』 433頁。

58) 『志布志町誌 上巻』 434頁。

59) 『志布志町誌 上巻』 435頁。

60) 梶浦晋『日本現存の宋元『大般若経』—剛中玄柔将来本と西大寺蔵磧砂版を中心に—』(神奈川県立・金沢文庫 1996年) 8頁。

61) 『志布志町誌 上巻』 435頁。

62) 梶浦晋『日本現存の宋元『大般若経』—剛中玄柔将来本と西大寺蔵磧砂版を中心に—』10頁。

63) 松下鉄太郎「大慈寺の磁器について」(『鹿児島文化財調査報告書第一輯』) 36頁。

64) 松下鉄太郎「大慈寺の磁器について」(『鹿児島文化財調査報告書第一輯』) 年35頁。

山普寧寺において、1278年から1289年に至る間に開彫された元版大藏經と推定されている⁶⁵⁾。一方、大慈寺に保存されている一蔵は南宋1162年の福州清涼禅院版と考えられている⁶⁶⁾。

榎本渉氏は南宋期の僧侶たちの留学成果は主に典籍（仏教のお経）の獲得、難義の解決、修法の獲得だった⁶⁷⁾と述べている。それで元代においても典籍（仏教のお経）の将来が主だったのではないかと思われる。第一章の第三節日元交流による年表を見てみると大藏經の施入がいくつか記されている。たとえば「浄明寺僧太平妙準、弟子を入元させ福州版大藏經を求む（『藏經舍利記』）」こと、「1342年天竜寺船一艘を元に遣わす」という船に上皇の天龍寺を創るため大藏經を求める願い、渡来僧である清拙正澄の弟子たちが師の撰述や頂相の著賛などを求めるためである。

『大般若經』は『大般若波羅蜜多經』の略名であり、仏教の消極的諸法実相論を説いた經の総称で、即ち般若（智慧）より見れば萬有は吾人の見る様な存在ではなく、皆空無相である事を説いたもので支那唐の年玄奘（602～664）が、630年西域を経て印度に入り經論七五部一三三〇卷を翻訳し、『律藏』、『經藏』、『論藏』に精通されて唐三蔵という尊号を授けられた⁶⁸⁾。大藏經は律藏、經藏、論藏の三つ（三蔵）に集大成されたものである。律藏は、仏教教団の戒律（教団の規則や、教団を構成する僧侶の日常生活の規律）を集めたもの、經藏は、仏陀の教えを集めたものである。經典と言う場合、狭い意味では經藏に含まれる「經」を意味する。論藏は、經典の解説や、仏教理論を集めたものである。

当時玄奘は仏学の源である印度に渡り藏經の持参を志し、非常に苦勞してやっと持参できた。そしてその梵語の藏經を中国語に翻訳し、国内外に知られ、朝鮮半島、ベトナム、日本にまで伝えられた。玄奘という名前が中華人民共和国内には歴史研究者しか知られないが、唐僧といったら子供にまで知られている。なぜかという中国四大名著の一つである『西遊記』は玄奘の印度に入って藏經を取り入れたことを物語っている。この物語は外国にも人気があり、日本にも演じられていたそうだ。そういえば、『大般若經』は非常に興味深い文物で、唐時代から現代にまで国内外にあこがれていると思われる。

(2) 南九州地域における銅鏡について

鹿児島県内にも、日元関係を示す遺品が数多く存在する。たとえば南薩摩市金峰町万之瀬川下流域から中国製の陶磁器や銅銭、薩摩川内市新田神社からは中国製の鏡、霧島市隼人町弥勒院跡や同宮旧神宮桑幡氏館跡からは中国製や東南アジア製陶磁器や銅銭等、志布志市志布志城跡や大慈寺・山宮神社からは中国製や東南アジア製の陶磁器や銅銭、經典や文書、鏡等が出土されている⁶⁹⁾。このように鹿児島県内には、中国製、東南アジア製の陶磁器、銅銭、鏡が多数出土している。それは南九州地域（現鹿児島県域）が中国大陸や東南アジア、琉球等との交流拠点である事を示している。

杉山氏は、クビライハンによって、元帝国を中心に世界規模の「ユーラシア大交易圏」が初めて出現した事を指摘している⁷⁰⁾。銅鏡もまた、元帝

65) 『志布志町誌 上巻』481頁。

66) 松下鉄太郎「大慈寺の磁器について」（『鹿児島文化財調査報告書第一輯』）年39頁。

67) 榎本渉『僧侶と海商たちの東アジア』講談社 145頁。

68) 松下鉄太郎「大慈寺の磁器について」（『鹿児島文化財調査報告書第一輯』）年35頁。

69) 日隈正守 高津孝 丹羽謙治『海が運んだ中世鹿児島—陶磁器・中国銭・書籍が語る』東アジア文明—（鹿児島大学付属図書館 2006年）、1～6頁。

70) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡（下）』142頁。

国の世界的規模の貿易圏に組み込まれていた日元貿易の際に、元の日本への輸出品ではないかと考える。新安沖沈没船遺物の中にも鏡が含まれていた。しかし当時の鏡は、どのような用途を持ち、どのような経緯で将来されたのかだろろうか。故に、寺師見国、西村強三、上村俊雄氏等によって

調査された南九州地域（現鹿児島県地域）の宋元鏡の流入期、用途等を参照しながら、元代に南九州地域（現鹿児島県地域）に将来された鏡の歴史的背景について掘り下げたい。鹿児島県下における宋元鏡の数に関する表は以下の通りである。

表4. 寺師見国「鹿児島県の古鏡（特に各神社の鏡）」

神社	舶藏鏡（宋元鏡） ⁷¹⁾							合計
	図文鏡	文字鏡	双鯉鏡	円圈素文鏡	仿製鏡	湖州鏡	花卉縁懸鏡	
山宮神社		二	一	三	二	九		十七
新田神社	三	二	一	五	三	二二		三六
勝栗神社			一		一	八		十
八幡神社	二	一		一	一	五八	二	六五
都萬神社	一			二	八			十一
鹿児島神宮								一

① 鏡の将来期について

銅鏡は、中国の周代に作られ、漢代を経て唐宋の頃までの作品が日本に将来されている。弥生時代には、青銅文化、鏡が伝わった⁷²⁾。上記の表に示したように鹿児島県下に伝存した鏡について

は、寺師氏、西村氏が鏡の銘文によって将来期を推測している⁷³⁾。以下に鏡の銘文による記年をみてみよう。

西村氏は、これらの鏡の銘文の中で最古の新田神社における湖州円鏡（1207年）から八幡神社の

表5. 寺師見国「鹿児島県の古鏡（特に各神社の鏡）」⁷⁴⁾

NO.	神社名	鏡名	紀年
1	新田神社	湖州円鏡	1207年
2	新田神社	湖州円鏡	1236年
3	八幡神社	洲浜菽双鳥鏡	1276年
4	新田神社	牡丹双鳥鏡	1294年
5	八幡神社	湖州円鏡	1294年
6	八幡神社	松竹双鳥鏡	1305年
7	新田神社	湖州変形八花鏡	1337年
8	八幡神社	龍膽唐草双鳥鏡	1343年
9	八幡神社	松喰鶴長方鏡	鎌倉後期
10	山宮神社	懸鏡（薄手）	南北朝時代
11	山宮神社	懸鏡（薄手）	南北朝時代
12	勝栗神社	松喰鶴鏡	南北朝時代から室町時代
13	勝栗神社	蓬萊鏡	南北朝時代から室町時代
14	八幡神社	湖州六花鏡	1489年

71) 寺師見国「鹿児島県の古鏡（特に各神社の鏡）」（『鹿児島文化財調査報告書第一輯』1954年）。西村強三「鹿児島県下の神社に傳わる中国宋元時代の鏡」（『九州歴史資料館研究論集9号，1983年）。

72) 寺師見国「鹿児島県の古鏡（特に各神社の鏡）」

73) 寺師見国「鹿児島県の古鏡（特に各神社の鏡）」。西村強三「鹿児島県下の神社に傳わる中国宋元時代の鏡」

74) 寺師見国「鹿児島県の古鏡（特に各神社の鏡）」。西村強三「鹿児島県下の神社に傳わる中国宋元時代の鏡」。

湖州六花鏡(1489年)に至る鎌倉前期以来室町中期に至る期間の中で、鎌倉後期から南北朝時代の間に数が増えていることを指摘している⁷⁵⁾。西村氏は、上記の表における10, 11番である山宮神社の懸鏡(薄手)による年代の検討はできないが、その形は新田神社の伝来の1334年在銘の方形銅板と同様であるから、その奉納時代を南北朝頃と考えている⁷⁶⁾。また12, 13番の勝栗神社における松喰鶴鏡、蓬萊鏡を南北朝時代から室町時代の鏡であると考えている⁷⁷⁾。寺師氏は、神社奉納鏡について、日本人は鏡を神聖視し、穢を忌んだので、使い古した鏡ではなく新鏡を神社に奉納していたと考えている⁷⁸⁾。このように鏡の将来期が確定すると、西村氏が指摘したような鎌倉後期から南北朝時代頃は、元時代に該当する。上記表4番から11番までは元代鏡が将来された物であるとみなされる。鹿児島県下の神社に伝わる銘文が記された中国製銅鏡の中で元時代の鏡は、大半を占めている。故に上記の鏡以外にも、鹿児島県下に保存されている鏡の中にも元代の鏡数が多いことが推測できる。上村氏は鹿児島県下の奉納湖州鏡の将来事情について検討し、鏡の将来時期は西村氏の見解と一致している。そして彼は、湖州鏡の出土遺跡や湖州鏡が奉納された神社の所在は河川の流域や周辺に水田を控えている事等から、これらの地域には平安時代から鎌倉・室町時代にかけてある程度の政治力や経済力をもった領主がいたと考えている⁷⁹⁾。上村氏の説は、当時の日宋貿易、日元貿易に関与した人々の階層についても解明している。すでに第一章第三節にも述べたよ

うに、日元貿易は北条氏の独占的な貿易であったが、上村氏が指摘しているような鏡の所有者も北条氏関係の領主ではないかと思われる。

前節の大慈寺蔵『宋版大般若経』と鹿児島県下における奉納された鏡は両方とも仏教関係の物である。また新安沈沈没船の遺物に銅鏡もあった事から、当時の日元貿易船に大蔵経と鏡がともに積まれていたのではないかと推測できる。鏡の銘文による記年の表を前に提示した年表と照合してみると、鏡が将来された時期は、ほぼ日元交流の時期と一致する事も確認できる。

② 鏡の用途について

前述したように、鹿児島県下における外来鏡の銘文により、鏡の多数について将来期が元代と確定できたが、これらの鏡がどのような用途を持ち、当時はるばる中国から将来されていたのだろうか。

鹿児島県下の神社に現存している鏡には、伝世する鏡と出土した鏡がある。出土鏡には、古墳墓からの出土、経塚からの出土、神社境内から出土した鏡がある⁸⁰⁾。寺師氏はそれらの鏡の出土状況から時代を推測し、その時代における用途を推測している。古墳時代には鏡が副葬品としてつかわれ、それは刀剣甲冑類と共に死骸の傍らに副葬されている⁸¹⁾。奈良時代から平安時代には寫経埋納が流行し、鏡が経塚から出土している。経塚は、平安時代の末法思想や弥勒信仰を背景に埋経供養のために営まれていた。当時鏡は経筒の側におかれ、経筒の蓋や底に応用され、除魔仏敵から保護

75) 西村強三「鹿児島県下の神社に傳わる中国宋元時代の鏡」

76) 西村強三「鹿児島県下の神社に傳わる中国宋元時代の鏡」。

77) 西村強三「鹿児島県下の神社に傳わる中国宋元時代の鏡」。

78) 寺師見国「鹿児島県下の古鏡(特に各神社の鏡)」。

79) 上村俊雄「南九州出土湖州鏡について」(鹿児島大学法文学部 1994年)。

80) 上村俊雄「南九州出土湖州鏡について」。

81) 寺師見国「鹿児島県下の古鏡(特に各神社の鏡)」。

の意味として使用されていた⁸²⁾。神社の境内から出土された鏡は、御神体・御神宝・仏像胎内納入鏡・祈願奉納鏡として伝世されていた。当時鏡は、仏教信仰の対象として、除魔的な呪力をもっていた⁸³⁾。鏡に梵語での呪語もあれば、自然の絵(例:動物)もある。これらの鏡は奉納鏡とし、当時仏教信仰の対象として、使用されていたと思われる。

IV 南九州地域を中心とした日元関係の特徴

以上では日本全体の日元貿易、日元間の文化交流に概観した上で、南九州地域における日元関係について、大慈寺蔵宋版大般若経、鹿児島県下における銅鏡等を素材として分析した。以下では、すでに一程度解明されている南九州地域を中心とした日宋関係、日明関係と比較することにより、日元関係の特徴を考察する。

(1) 南九州地域を中心とした日宋貿易と日元貿易の比較

宋は遼・西夏・金等の異民族国家と対立し、戦費・歳幣の出費がかさんだ。その結果宋朝廷は、財政困難となりつつあったので、諸外国朝貢使の来貢による朝貢貿易と、民間貿易を両方とも奨励した⁸⁴⁾。その結果国内の経済面では、農業や手工業の生産が大きく発展するとともに、国内の商業流通は著しく活発化し、各地で都市化が進展した。そしてこのような国内の経済発展に基づき、

対外貿易も大きく伸びていった。この宋代の対外貿易の発展は、東南アジア・西アジア方面との海上交易を幹線とするものであるが、その支線の一つとして、宋と日本との海上貿易路がある⁸⁵⁾。

唐の国内内乱により、治安が乱れ、交通不安のため遣唐使廃止後、日本国の朝廷は、対外貿易に消極的であった⁸⁶⁾。しかし宋は、積極的に貿易を推進していた。また11世紀後期、日本の貴族たちは、宋の品物を入手するのを希望していた⁸⁷⁾。その結果、日本側は、宋との貿易に対して、消極性から積極性に転じた⁸⁸⁾。当時の日宋貿易では、宋商人は、大宰府を公設市場とし、ここで大宰府の監督を受けながら貿易を行っていた。このように大宰府の監督を受けながら貿易を行う理由は、朝廷等が専売権によって、優良品や珍貨を優先的に買い上げていたからである⁸⁹⁾。この行為は、日本商人たちに不満を起こさせた。日本商人たちは朝廷の管理下で貿易するよりも、自分達が直接貿易を行う方が、自分の希望する商品を手に入れやすいと思った⁹⁰⁾。

しかし山内氏は、森氏の説である日本商人と宋商人が大宰府の管理を避け、密貿易を行われていた事を再検討し、日宋貿易は十二世紀の中葉までは、大宰府の管理下で貿易を行っていた事を指摘している⁹¹⁾。このように近年、森氏の日宋貿易に関する視点が再検討されつつある。

森氏は日宋貿易と日元貿易とを比較し、それについてこのように考えている。日宋貿易が平和的

82) 上村俊雄「南九州出土湖州鏡について」。

83) 上村俊雄「南九州出土湖州鏡について」。

84) 森克己『続々日宋貿易の研究 二巻』11頁。

85) 山内晋次『日宋貿易と「硫黄の道」』(山川出版社 2009年)2頁。

86) 森克己『続々日宋貿易の研究 二巻』7~8頁。

87) 森克己『続々日宋貿易の研究 二巻』13頁。

88) 森克己『新訂 日宋貿易の研究 選集第一巻』, 11頁。

89) 森克己『続々日宋貿易の研究』, 13頁。

90) 森克己『続々日宋貿易の研究』, 13頁。

91) 山内晋次「日宋の荘園内密貿易説に関する疑問——世紀を中心として」『日本歴史9中世社会の成立』, (東京堂出版, 1989年), 424~434頁。

管理に行われた民間貿易である。これと反対に日元貿易の方が、日宋貿易の延長であり、日宋貿易のように民間貿易が行われた。しかし平和的な貿易関係ではなく、「蒙古襲来」により盛んな貿易が行われていなかったと考えられていた⁹²⁾。

しかし、既に述べたように、新安沖沈没船の発見により、従来盛んではないと考えられた日元関係観、あるいは森氏が指摘してきた戦略的な日元関係は批判的に再検討されるようになってきた。近年南九州地域における発掘調査で、多数の銅銭、陶磁器が出土している。

さて次に、南九州地域における鹿児島県南さつま市坊津一乗院跡出土の陶磁器⁹³⁾、万之瀬川河口域付近出土の陶磁器、銅銭、隼人町鹿児島神宮関係遺跡出土陶磁器について考えてみよう。一乗院周辺には、多数の陶磁器が出土している。それらの陶磁器の中に宋時代とみられる物が少ないが、元代、明代とみられる陶磁器が多く存在している⁹⁴⁾。また万之瀬川河口域の周辺には十二か所の遺跡が発見され、当地域の陶磁器は中世前期或いは13～14世紀であることが確定されている。その上遺跡の発掘場所により、陶磁器は当該地域の領主、荘園、神社などに所有されていた事が判明している⁹⁵⁾。ここから当時の日宋貿易、日元貿易に関わった人達は何れも地域の有力者であったことがわかる⁹⁶⁾。万之瀬川河口域付近出土の陶磁器発掘は、銅鏡の発掘位置により、銅鏡の所有者も地域有力者であったと考える事と一致している。この事から、日元貿易には日宋貿易と共通する要素

があったことが明らかである。しかし日元、日宋間の文化交流の頻度については、日元間の文化交流が日宋間の文化交流よりもさらに盛んであったと思われる。それは、元代の渡海僧の人数は二百二十数人であり⁹⁷⁾、実際の交流期間は64年間で毎年平均4人ずつ渡海僧がいる。宋代の渡海僧の人数は119人であり、110年間の交流期間で毎年平均1人である⁹⁸⁾。榎本氏が元時代の僧侶往来が宋時代の僧侶往来と比べれば3～4倍の頻度で、この頻度は前近代の仏教交流史上類を見ないと述べている⁹⁹⁾。特に南九州地域における僧侶である無惑良欽と古先印元の活動により、元代の南九州地域の僧侶たちの活発さを感じる。また第二章に論述した大慈寺における『宋版大般若経』の将来、銅鏡の将来が南九州地域における日元関係の活発さを十分物語っていると考えられる。故に南九州地域における日元関係は、仏教方面での彩が深いと断言してもよいであろうか。万之瀬川河口域は対外地域と内陸地域とを結んだ寄港地・中継貿易地とされている¹⁰⁰⁾。この事からわかるように当時の日宋、日元貿易は万之瀬川河口域を貿易港として、民間貿易として行われていたのではないかと考えられる。柳原敏昭氏は、日宋貿易を重視した平氏が九州ことに薩摩国・島津荘支配を強化し、万之瀬川河口港で日宋貿易を行っていたと考えられている。そして当時の貿易のルートは慶元（寧波）—琉球—奄美諸島—万之瀬川河部（一博多）という南方ルートであった事が指摘されている。前述した大慈寺蔵『宋版大般若経』は元末

92) 森克己『新訂 日宋貿易の研究 選集第一巻』, 11頁。

93) 『海上の道と陶磁器』(南さつま市坊津歴史資料センター輝津館 2008年), 3頁。

94) 『海上の道と陶磁器』, 3頁。

95) 『海上の道と陶磁器』, 4頁。

96) 『海上の道と陶磁器』, 4頁。

97) 榎本渉『僧侶と海商たちの東シナ海』, 191頁。

98) 榎本渉『僧侶と海商たちの東シナ海』, 137頁。

99) 榎本渉『僧侶と海商たちの東シナ海』, 191頁。

100) 『海上の道と陶磁器』, 5頁。

内乱期に剛中の弟子たちが、福建—薩摩—高瀬という航路を利用し、それを将来したと推測してきた。おそらく当時、万之瀬川河口域を利用したのであろう。日宋貿易の航路について、後ほど述べる山内氏の硫黄による日元貿易を論述する際に、再び取り上げようと考えている。

鹿児島神宮には、中国の青磁・白磁・青花、朝鮮の高麗青磁、元代の飛青磁、青磁壺、青磁皿等が納められている。その事から鹿児島神宮は、海外と活発に貿易を行っていて、「貿易陶磁の終着点」と呼ばれる場所に位置していたと考えられている¹⁰¹⁾。その陶磁器の中で一番注目すべきであるのは、元代の陶磁器である。杉山氏が指摘しているように、元代には世界規模の「ユーラシア大交易圏」が形成されていたので¹⁰²⁾、元代における青磁の技術は、宋代のようにただ中国南部だけに限定された技術ではないと思われる。村井章介氏の研究にも、元代の陶磁器技術は、宋代の白磁焼成技術の上にイラン産のコバルト顔料を使って器面に青色の絵を描く事が可能な段階に至っていると指摘されている¹⁰³⁾。鹿児島神宮における元代の飛青磁は、イラン地域の技術により作られている事を思えば、南九州地域における日元貿易は、当該地域が世界貿易圏の中に組み込まれている事を示している。これに対して日宋貿易は、中国南部におけるアジア地域間に限定された貿易に過ぎないと考えられる。こうして見ると南九州地域における日元貿易の活動領域は、日宋貿易の活動領域よりもさらに幅広いことが分かる。杉山氏と村井章

介氏は、日本留学僧の足跡は江南にとどまらず、中国北部にも及んでいる事を指摘している¹⁰⁴⁾。たとえば雪村友梅の河北省石家荘の五台山から陝西省長安南郊翠微寺までの活動、龍山徳見の大都、河南省白馬寺等の活動が証明できる。しかしこれと反対に宋代には、入宋僧の活動範囲は両浙路（現在の浙江省と江蘇省の長江以南を合わせた範囲）に収まっていた。当時の宋は、日本僧が両浙から北上して金・元と接触することを警戒し、その活動範囲を意図的に両浙路内に留めていたと考えられている¹⁰⁵⁾。この事から当時の中国大陸では、南北対立した関係であった事がわかる。山内晋次氏は、軍事的に弱体であった宋は、日宋貿易を活用し、南九州地域の硫黄島から硫黄を輸入し、対外戦争で用いる火薬兵器の原料として使用していたことを指摘している¹⁰⁶⁾。以下では日宋貿易における硫黄について詳述していく。

山内氏が指摘している日宋貿易における硫黄の将来航路は、薩摩—博多—杭州・明州であった。そして硫黄の交易は、国家的な管理を受けていた。その管理の最大の目的は、遼・金・西夏等軍事的に対立する異民族国家への火薬技術及び原料の流出防止であった¹⁰⁷⁾。この事から日宋貿易における硫黄は宋の国家管理を受けていたことを考えてみると、日宋貿易は複数の形態で行われていた事がわかる。それは民間貿易、国家管理貿易等である。日元貿易の方は民間的な貿易のみが行われている。

101) 『海上の道と陶磁器』、8頁。

102) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(下)』、142頁。

103) 村井章介『日元交通と禅律文化』、216頁。

104) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(下)』、280頁。村井章介『日元交通と禅律文化』『南北朝の動乱』、247頁。

105) 村井章介『僧侶と海商たちの東シナ海』、145頁。

106) 山内晋次『日宋貿易と「硫黄の道」』、1～30頁。

107) 山内晋次『日宋貿易と「硫黄の道」』、41頁。

(2) 南九州地域における日元関係と日明関係との比較

以上では南九州地域における日宋関係と日元関係との比較について考察した結果、日元関係の特徴を十分に示す事ができなかった。故に私は日元関係の特徴をさらに明らかにするために、元が中国大陆から撤退した後に中国大陆を支配した明¹⁰⁸⁾と日本との関係、即ち日明関係を日元関係と比較してみたい。従って本節では、南九州地域における日明関係を日元関係と比較し、日元関係の特徴について再検討してみたい。

元末になると元国内で帝位継承争いが起こり、疫災、内乱が相次いたため、1351年に紅巾の乱が勃発した。反乱が拡大する中で、次第に頭角を現した朱元璋（洪武帝）は、南京を根拠に長江流域の統一に成功し、1368年明を建国した。洪武帝は明建国後ただちに北伐を開始し、元のハンであるトゴン・テムルに大都（現北京）を放棄させ、北に退却させた¹⁰⁹⁾。故に明の建国は、元の滅亡というわけではない。中国北部に退いた元は、明と対立した関係を持っていた¹¹⁰⁾。

農民出身の朱元璋（洪武帝）は、農本主義を主とし、文化人、知識人を大虐殺し、経済運営と通貨管理に無知であった¹¹¹⁾。そして朱元璋（洪武帝）は、元代の積極的な対外貿易政策を変更し、消極的な貿易政策いわゆる海禁政策を行なった。海禁政策を実施したのは、元内乱の際朱元璋（洪武帝）の対抗者であった方国珍や張士誠の残党が、倭寇と連携する事を恐れたためである。この結

果、人々が私的に海に出る事と倭寇が中国大陆に上陸する事は禁止された¹¹²⁾。従って当時の明は、明国内の人々と外国との貿易を国家が管理し、民間貿易を禁止した¹¹³⁾。即ち、宋代以降活発に行われた民間貿易は、一切禁止されたのである。このような明の政策下において、当時の日明関係はどのようなものであったのだろうか。

明は、東アジア世界で活動していた倭寇の禁圧を日本に対して要求し、同時に朝貢を勧めるために使節を派遣した。日本では、足利氏が奉じる京都の北朝と吉野朝廷（南朝）が対立している南北朝時代で、九州地方を征圧していた南朝方の懐良親王は明に朝貢し、「日本国王」に冊封されていた。当該期の日明関係は、明の皇帝に対して日本が朝貢する形式で行われた。室町幕府3代将軍であった足利義満は、1401年明に使節を派遣して冊封を受け入れ、1404年に日明貿易が始まった¹¹⁴⁾。義満死後4代将軍足利義持や前管領斯波義将らは、朝貢形式に不満を持ち、1411年貿易を一時停止した。日明貿易は、6代将軍足利義教時代の1432年に復活する¹¹⁵⁾。このように日明間では、1404年から1547年までの間に19回の遣明船が派遣された。日明間で派遣された派遣船の多くに、島津氏はかわっていたと考えられている¹¹⁶⁾。

上述のように島津氏は、日明貿易に積極的に活躍していた。また鹿児島県下から多数の銅銭、陶磁器が出土し、その多くが明代の銅銭、陶磁器である事も一程度解明されている。次に鹿児島県南さつま出土陶磁器、鹿児島県霧島市隼人町鹿児島

108) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡下』221頁。

109) 村井章介「倭寇と「日本国王」」『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』（吉川弘文館、2010年）。

110) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡下』221～225頁。

111) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡下』232頁。

112) 村井章介「倭寇と「日本国王」」『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』。

113) 上田信『中国の歴史09 海と帝国明清時代』（講談社、2007年）、130頁。

114) 村井章介「倭寇と「日本国王」」『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』。

115) 上田信『中国の歴史09 海と帝国明清時代』（講談社、2007年）、101～103頁。

116) 村井章介「倭寇と「日本国王」」『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』。

神宮関係遺跡出土陶磁器について考察していきたいと思う。

近年坊津町一乗院跡に、明代を中心とした陶磁器が多数出土しているの、中世後期を中心とした時期における対外的な要港であることが明らかになってきた¹¹⁷⁾。前節でも述べたように、万之瀬川河口域の周辺には十二か所の遺跡が発見され、当該地域には、中世前期或いは13～14世紀代を中心とした陶磁器である事が確定されている。即ち、日宋貿易、日元貿易が行われていた時期に、万之瀬川河口域は、利用されていた港であった事が明らかである。ではなぜ南九州地域における日明貿易の拠点は、対外貿易港として位置づけられていた万之瀬川河口域から坊津港に移ったのであろうか。この理由については、橋口亘氏は次のように考えている。万之瀬川河口域における加世田、鹿籠という場所は、坊津の出入貨物の需給と密接な関係をもつ地域であり、加世田、鹿籠地域は島津氏の権力下に置かれていた。そしてこのような影響下で、坊津地域は中世後期に島津氏の強い影響下に置かれるようになった。しかし坊津が海外港として栄えたもっとも重要な原因は、優れた地形的環境であると考えられている。それは坊津港の背後にある山間部は坊津の持つ貿易中継地的な性格を持ち、海外からの貿易品を内陸へ移動する便利がある¹¹⁸⁾。「何風二ても船繋がり自由」といった碇泊する事可能である点である。このように坊津は、中世後期における対外貿易港である事が確認されている。さて当時南九州地域では、日明貿易はどのような形式で行われていたのであろうか。

藤田明良氏は『一乗院来由記』の海外交流記事を紹介、検証し、当時一乗院の琉球、明国との交流事項を詳述している¹¹⁹⁾。本論文の中で一番注目すべきであると考えられているのは、南九州地域における僧侶たちは、中国（明）と朝貢貿易関係であった琉球を通じて、有利な条件で明と交流していた事である。また近年南九州地域において、明時代の銅銭である洪武通宝が多く出土している。沖縄においても洪武通宝が多数出土していることにより、南九州地域は、当時琉球を経由して中国銅銭を大量に入手していたことも明らかである¹²⁰⁾。

上述した南九州地域における僧侶の交流、中国銅銭の輸入は、琉球王国を通じて実現していたのである。この事例は、明の解禁政策が実施され、民間貿易が禁止されていた事を直接示している。また、日明間の僧侶たちは、日元間の僧侶たちのように自由な交流が出来なくなったのである。

藤田明良氏の研究から、南九州地域の僧侶たちは、主に外交文書の作成や外国使節との交渉役として活躍していた事もわかる。この事例は、元代僧侶たちの活躍と大きく異なっていると考えられる。すでに第一章第三節で述べたように、元代僧侶たちの入元目的は、中国を遍歴して修行・参学に励み、帰国後の地位と名称を保証されるためである。この事は、たとえば南九州地域の入元僧である古先印元の活動を参照すれば理解できる。

明代に日本の僧侶たちは、外交文書の作成や外国使節との交渉として活躍できた事も、元時代の一山一寧が土台を作ったのである。彼は、はじめて作偈の試験を行い、五山文学の発展に土台を

117) 上田信『中国の歴史09 海と帝国明清時代』（講談社、2007年）、101～103頁。

118) 橋口亘「中世港湾坊津小考」『中世西日本の流通と交通』（高志書院刊、2004年）。

119) 橋口亘「中世港湾坊津小考」『中世西日本の流通と交通』（高志書院刊、2004年）。

120) 藤田明良「中世後期の坊津と東アジアの海域交流—『一乗院来由記』所載の海外交流記事を中心に—」『九州史学研究会・境界からみた内と外・九州史学』創刊五〇周年記念論文集下』（岩田書院、2008年）

作ったのである。

上述したように大隅（国）正八幡宮（現鹿児島神宮）関係城跡には、明時代とみられている陶磁器が多数出土している。そして大隅（国）正八幡宮は、海外と活発に貿易を行っていて、「貿易陶磁の終着点」と呼ばれる場所に位置していたと考えられている。前述したように、元代における青磁の技術は、宋代のようにただ中国南部だけの技術ではなく、西域イランの技術を取り入れていた事を推測できた。当時元は、中国北部に撤退し、明と対立関係である。明は元的全領域を支配できていなかったのである。その上明は元と違って、対外的に自由な貿易ではなく、海禁政策を実施していた。故に明時代の陶磁器の技術も明国内だけに限られたものではないかと考えられる。杉山氏が、明代の海禁政策（永楽帝政権以外）により、元代西欧は東方から摂取した航海術と火器とを進歩させた。それは、将来の歴史上では、中国を中心としたアジア地域から西欧地域におけるアメリカ、イギリスの方へ発展した大転回であったと指摘している¹²¹⁾。このように見ていくと、日明貿易、日明間文化交流の領域幅も日元貿易、日元間文化交流の領域幅ほど広くはないことが明らかである。そして南九州地域における日元貿易こそは、当該地域が世界貿易圏の中に組み込まれているのではないかと推測できる。

(3) 南九州地域における日元関係の特徴

以上のように、日元貿易、日元間の文化交流に関する日本全体の動きを概観した上で南九州地域を素材として日元関係を示す遺物を考察した。当該期南九州地域における日元貿易や日元間文化交流の分析を通じて、当時の日元貿易、日元間の文化交流の実態が明らかになった。南九州地

域における日宋関係と日元関係、日明関係と日元関係についての比較をしてみた結果、南九州地域における日元関係の特徴が明らかになった。それは、元時代の自由、積極的な貿易政策の下で、日元貿易、日元間文化交流は、民間交易主体で行われた。そして、貿易の領域から言えば、日宋貿易は、中国南部における東アジア地域間に限定された貿易に過ぎない。日明貿易においても、中国北部に撤退元と明が対立関係であり、明は元的全領域を支配できていなかったのである。その上、明が元と違って、対外的に自由な貿易ではなく、海禁政策を行っていた。そゆえに明代陶磁器の技術も国内だけに限られていたと思われる。それに反して、日元貿易の方が積極的で、アジア、西欧まで広がったのである。このように見ていくと、南九州地域における日元貿易の活動領域の幅が広くて、当該地域が世界貿易圏の中に組み込まれていたと思われる。そして南九州地域における元代陶磁器の製造技術は、中国国内だけに限られた技術ではない事も推測できる。

大慈寺における『宋版大般若経』の将来、銅鏡の将来が南九州地域における日元関係の活発さを十分物語っている。そして、これら仏教方面の文物は元時代に将来したので、南九州地域における日元関係は、仏教方面での彩が深いと思われる。

VI 終わりに

本稿では、南九州地域（現鹿児島県域）における日元関係の特徴を掘り下げるために、クビライハンによる元帝国の成立及び対外政策、日本遠征の原因等にふれながら、二回にわたるモンゴル襲来期について述べ、一方で戦争を行いながら、他方では日元貿易とそれと伴う文化交流が活発に行

121) 杉山正明『モンゴル帝国の興亡下』233～234頁。

われていた実態につき考察してみた。そして日元関係の実態を探るために、五島遭難船、新安沖沈没船の分析による日元貿易の実態解明と二百二十数人の渡海僧と三十数人の渡来僧の活動を探るという二つの側面での分析により、日元間における日元貿易、文化交流の全体を踏まえた。その結果、元時代の自由、積極的な貿易政策の下で、日元貿易、日元間文化交流は、民間交易主体で活発に行われていた事が明らかになった。

更に日元貿易、日元間の文化交流に関する日本全体の動きを踏まえて、南九州地域における日元関係に関する大慈寺蔵『宋版大般若経』、鹿児島県下における銅鏡等を素材として日元関係の実態を検討してみた結果、大慈寺蔵『宋版大般若経』の将来は元代であることが確認でき、また当時福建—薩摩—高瀬という交易ルートを利用して将来

された可能性を推測できる。

また更に、一程度解明されている南九州地域を素材とした日宋関係、日明関係を日元関係と比較することにより、日元関係の特徴を考察してみた。その結果、南九州地域における日元貿易の活動領域の幅は広く、当該地域が「ユーラシア大交易圏」¹²²⁾の中に組み込まれていたのではないかと考えられる。そして南九州地域における元代陶磁器の製造技術は、元の国内にだけ限られた技術ではない事も推測できる。もう一つの特徴としては、南九州地域における大慈寺蔵『宋版大般若経』、多数の元代銅鏡等仏教関係の文物は、元時代に将来されたので、南九州地域における日元関係は、仏教関係の彩が強いのではないかと考えられる。